

## 人や社会が使いたくなる技術の研究開発

小池 春妙 (こいけ はるみ)

名古屋大学 未来社会創造機構

モビリティ社会研究所 社会的価値研究部門

専門分野・キーワード：心理学

自己紹介：人の行動について興味があります。名古屋大学 COI では、プロトタイプを用いた実証実験支援として、人への効果や技術受容性評価などを行っています。



研究開発成果の社会実装において、製品・サービスが人や社会にもたらす効果・影響と、人や社会による製品・サービスの受容・選択とは、両輪のようなものではないだろうか。

名古屋大学 COI では、ビジョン「高齢者が元気になるモビリティ社会」における「高齢者の元気」を well-being としてとらえ、技術がどのようにその維持・向上に資するかを調査により整理した。今後、プロトタイプなどを用いて、well-being の規定因への効果を検討していく予定である。一方、受容・選択については、その要因を整理し、高齢者視点での技術受容性モデルを構築した。個人の興味関心や価値観が主観的な有用性や操作性に影響すること、特に主観的な有用性が支払意思額に影響することが示された。これら取り組みは、社会心理学者により行われたが、自然科学系研究者の協力が不可欠であった。

このような自然科学と人文・社会科学との連携の必要性が、持続可能な開発目標 (SDGs) や Society5.0 などの様々な場面で指摘されている。科学技術イノベーション政策に関する公的シンクタンクのひとつである研究開発戦略センター (CRDS) は、戦略プロポーザル「自然科学と人文・社会科学との連携を具体化するために一連携方策と先行事例―」にて、連携に関する現状や課題を整理している。これによれば、社会的要請に対応するための研究開発プロセスの中で連携が必要になるフェーズは 3 つあるという (Fig. 1)。本拠点における効果検証や受容性評価の取り組みは、「フェーズ 3：研究成果の実装を視野に入れた取り組み」と言える。

社会実装が求められる COI プログラムにおいては、自然科学と人文・社会科学との連携による研究開発がますます必要になると考えられる。そこで、今回は名古屋大学 COI での取り組みを紹介することで、製品・サービスの効果検証や受容性のほか、連携をめぐる課題などについて、議論したい。

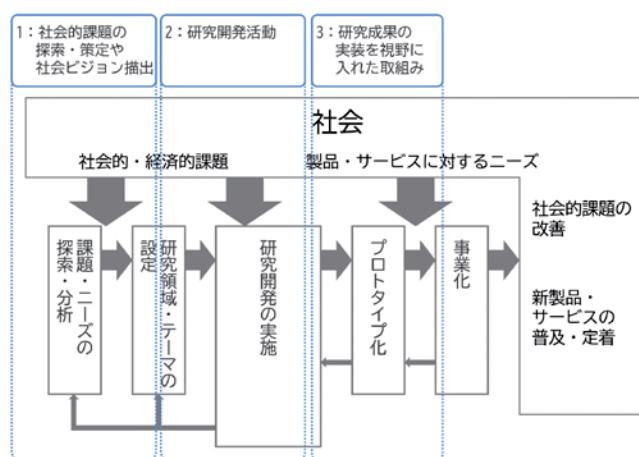


Fig. 1 社会的要請に対応するための研究開発プロセスと、連携が必要とされる3つのフェーズ

出典：自然科学と人文・社会科学との連携を具体化するために一連携方策と先行事例―